

ているのは、暑さのせいだと思われる。これは実に氣候が季節はずれであることで、人を傷め、物を害しないかと案じられてならない。そもそも、三公は陰陽の気を整え、民の福利を図るべきもので、牛の喘ぎは自分の職務上当然心配すべきことである」と。これを聞いた下役人は、敬服して『吉は大体(物事の本質)を知っている。』と思った。」これが「丙吉問牛」の逸話であるが、この話は「組織のトップに立つ者の心構え」を我々に教えていると思います。

丙吉の故事を見てみないと、
①まず丙吉には、トップとしての強い自覚と危機感を感じます。丞相は三公(天子の側近として政治を行う三人の高官。前漢時代は、丞相、大尉、御史大夫をいう。)の筆頭として、民の幸福と福利とを図ることが最大の職務であると自覚しており、更に、当時の中国人の考え方として、もし政治が悪くと陰陽の気が乱れ、氣候が不順になつて天変地変が起り、内乱が生じて最後には天命が革る(革命)とされ

ており、このことに対する強い危機感を持つております。

なお、前漢が減びたのは、吉が丞相であった頃から更に六十年程後のことで、この頃は国はまだまだ安定していた時代であります。

②次に、小事と大事とを感情にとらわれることなく冷静に見分ける眼力と、小事には口を出さない度量の大きさがあります。小事にかまけていると、大事を見落とすことになりがちです。

「宰相不親小事(宰相は小事に親しまず)」と言った吉のこのことばは、組織のトップとして、なすべき事となすすべきでない事とを強烈に象徴していると思います。

③そして何よりも大切なことは、変化や危機の兆候を見逃さないことです。人の死傷をも小事として見過ごしながら、牛の喘ぐ姿を見て氣候の異常を推察する。この目先の現象に惑わされることなく、些細なことの中にも物事の本質を見抜く注意力と洞察力の確かさには感心します。

いかに急激に変化する時代であっても、後日、振り返って見ると危機や危険な兆しは目に見え、耳に聞こえていたということはよくあることです。組織のトップにとって最も大切なことは、これらの兆しを決して見逃してはならないことだと思います。後になって「想定外」ということがないように最大限の努力が求められます。

④最後に大事なことは、危機への対策を直ちに実行することです。丙吉がどのような対策を講じたかは、この故事には出てきませんが、吉は、先ず不順な氣候に備えて、穀物の備蓄と治山治水に努めたことと思います。そして次には、陰陽の気が乱れた根本原因である、民の幸福を阻害しているものが何であるかをチェックするため、政治に不正や不適切な点がないかを見直して、これらを是正すべく努めたことと思います。これこそ丞相として最大の職務だからです。

以上が「丙吉問牛」の故事を通じて私が感じた教訓であります。

カイザーワイナリー親子が日本にやってきた

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)



旬に日本へやってきた。念願であった息子の父シユテファンカイザーが赴任した岐阜県多治見の修道院を訪ねる目的もあつたのだ。

この修道院は一九三〇年にドイツの神言会の神父が建てたものだ。

教会には当時として日本では珍しいパイプオルガンがあつた。今でも弾ける。中世ヨーロッパを忍ばせる二階建ての白亜の建物は多治見では珍しかったであろう。約

一万坪ある館の周りにはワインを作るためのブドウ畑が広がっていた。一九三八年にシユテファンカイザーがブドウ栽培の強化のために呼ばれ、ワイン作りに専念した。

私は修道院に親子を案内した。今もブドウ畑はあつた。孫のクルトが葡萄の木をみるなり、おじいさんの木だといった。古木が三本、幹がひび割れていた。彼らにはおじいさんが育てた木を見分けることが出来るのであろう。

孫のクルトは祭壇の前に膝まずきしばらく祈りを捧げていた。

オーストリアからテンノウワインを作っているカイザーワイナリーの親子が今年の三月幕張メッセで行われたフーデックスの出展に二月の下

裏に会った男



永岡 慶之助

(作家)

志向が内向きになったというのであろうか、近頃は日本の若者が海外へ行くのを嫌がるようになったそうだ。海外留学はもとより、一時流行した異国放浪など、まったく魅力を覚えなくなったらしい。どうやら妙な冒険心など起さず、公務員にもなつて安穩な一生を送ろうといった心情のようである。これについて、私にはふと思ひ出される光景がある。あれは幾年前のこと

だろうか、パリのオルソー空港だから古い話になるが、いつとき評判になつた北海道観光の「蟹族」、横広のリュックを背負つた姿から、そう呼ばれた若者たちが、北海道の夏を賑わした時代があつた。

あの「カニ族」そっくりの姿―ピケ帽にスニーカーを履いた二十歳前後の娘さんが、オルソー空港の構内で思案顔でたたずんでいたのだ。シャツや

ジーンズも薄汚れているのを見ると、欧州各国を幾日も旅をつづけているようだ。そのうち、コインを手の平で翻えしたと思うと、行く先が決まつたらしく、私の顔を見てにこつと微笑してからバスの乗り場へ去つていったのである。まるで日本国内を旅するような顔をして。その時のことを思うと、日本の若者が内向きになつたなど、まさに隔世の観があるというほかはない。

ところで、NHKの大河ドラマ、来年度は「平清盛」で、その次が、「新島八重子」だそう。八重子は、会津藩の砲術指南役山本覚馬の妹であり、鶴ヶ城落城の前夜、三の丸の雑物蔵の白壁に、月の光を頼りに、笄（さかん）をもつて、明日よりは何処の誰が眺
馴れし御城にのこる月影
と彫りつけた。

彼女は男装し、七連発のスペンサー銃をとつて、夜襲隊に参加したほどの女丈夫だが、後日、同志社のキリスト者新島喪夫人となるのだから人生は面白。

その新島襄、元の名は七五三太。上州安中薩三万石の江戸屋敷で生まれた際、急飛脚で男子誕生を知った国元の祖父が、思わず、「したー」と言ったことから名づけられたという。

ところが、祖父を狂喜させた七五三太は、性、外向き志向の若者に成長、ついに元治元年（一八六四）六月十四日、北海の函館の町が夏祭りで賑わう夜、米国貨物船によって日本脱出を敢行したのである。これは京都三条小橋の「池田屋騒動」で新撰組の名が一躍世に知られた年だ。

貨物船の船長は、敬虔なるキリスト教の信者で、航海中、七五三太の人柄をじっと見て、呼びにくい七五三太を「ジョー」と呼んだ。

新島襄の誕生であり、更に船長は米國ボストンに入港するとともに、この日本の若者をボストン切つての富豪に紹介したことから、襄の身に奇跡が起きる。船舶十余隻の船主である富豪の保護をうけ、襄は神学校に通うという思いもよらぬアメリカ大陸での第一歩

を踏みだすことが出来たのだ。

以後、新島襄は、着実に人々に親愛される人格者に成長するのだが、この新島襄と偶然に出会った会津の若者がいる。

若者の名は日下義雄。元の名は石田五助といい、飯盛山で自刃した石田和助の兄で、鳥羽伏見戦で銃創をうけたが、同僚の角田秀松に助けられて大阪へ退却した。秀松は後に海軍に入り、日露戦争では対馬戦時指揮官となり、「鬼角」の異名で知られた人物だ。彼が軍艦清輝の航海長として航海したので、わが国の欧州航路の最初である。

ところで、この角田秀松によって助かった石田五助は、更に函館の五稜郭戦争に参戦したが敗戦、危うく助命されたのを機会に、「日下義雄」と改名したので。その後、幾度遷あつて米國留学のチャンスに恵まれ、米歐視察の大倉具視一行の船に同乗してサンフランシスコに着いたものの、それから単独行動だ。

地理不案内で困惑した義雄は、先に

留学中の同藩士山川健次郎（後日、東京、京都―九州…各大学総長歴任）のところを訪ねようと、さる駅の待合室で汽車を待つていたところ、見知らぬ異国人が寄つて来て、「君は日本人か？」と問う。「そうだ」と答えると、「ならば、これからパーティがあるから一緒に来給え」と語った。が、日本を出る際、「見知らぬ異国人には気をつけよ」と注意されていたので、きびしく断わり、さつと別の席に移った。それで異

国人は立ち去ったが、まもなくして日本人らしい若い紳士が現れて、「自分には新島襄という者ですが、これより州知事主催のパーティが催されるゆえ、一緒に出席されませんか」

と丁寧に誘った。が、先に手きびしく断つた手前バツが悪いから、「先約があるので」といつて別れた。この日下義雄、帰国後は長崎および福島県知事を歴任、渋沢栄一の第一銀行監査役をつとめている。どうやら幕末明治人の方が、果敢に海外へ飛び出たようである。

フエリアード



山本千明

(ECC英会話講師)

初めて彼らに出会ったのは、昨年の夏。「うちの会社でこんなイベントがあるよ」と友人がチケットをくれた。そこには「ボサノバ」という文字と、俯きかげんにギターを抱いた女性の写真。中学時代にレコードで聴いた覚えのある「ボサノバ」という懐かしい言葉と、どこか憂いを秘めた彼女の眼差に引かれて、私は当日ライブ会場に向かった。

真新しい住宅展示場には、木の香りが漂い、テーブルの上でキャンドルの光がゆらめいている。広いチュニック、黒のボレロに黒のパンツというシンプ

ルな装いで彼女は現われた。キーボード担当の男性の指が、鍵盤の上を滑らかにすべり出し、彼女は肩までサラリと伸びた髪を揺らせて歌い始める。その声は発せられた瞬間、白い煙のようにスーッと立ち登り、ゆらゆらと広がって、ふわりと空気に溶け込んでいった。消えた後も、ほのかに音の余韻が残る。心をとき解されたような、至福の時間が流れていった。

一週間後、私は再び彼らのライブステージの前に居た。「もう一度聞きたい！」と調べて見つけた場所は、高松市商店街にあるクリスタルドーム。地

元のアーケード街を活性化すべく、平成二年から再開発が始まり、街はスタイリッシュに生まれ変わってきた。そのシンボルの存在が、クリスタルガラス三千枚以上使用の巨大ドームである。その透明なドームの下で、二人は「街角に音楽を」という企画のレギュラーとしてステージに立っていたのだ。「彼女」の名前は「山本千明」。そして「彼」の名は「小山寛治」。二〇〇七年の秋にボサノバデュオ「フエリアード」として活動を開始していた。

クリスタルガラスを通して降り注ぐ光の中で演奏が始まった。なつきさんの声は、水鳥のごとく軽やかに舞い上がり、やがて狙い定めた地点に寸分たがわず降りてくる。寛治さんは、音のさざ波を立てながら迎え入れ、二人の呼吸がピタリと重なり合って、水面に次々と弧を描いていく。心地良い調べがドームいっぱい満ちて観客の表情を和らげる。

世の中に「上手いシンガー」はどこにでも居る。ただ、個人的には「どうだ参ったか」と言わんばかりの歌が多いことに、やや食傷気味だった。技術

的に素晴らしいことは分かるが、何度
も聴きたいとは思えない。そんな私に
とって「フェリアード」の奏でる音楽
は、新鮮な驚きだった。それまで「ボ
サノバ」がブラジルの音楽で、ポルト
ガル語であることすら知らなかった。

馴染みのない言語故に、曲の内容は全
く理解できない。なのに耳を澄ませる
だけで、「喜び」や「切なさ」が響き
として伝わってくるのだ。そして「山
本なつき」という女性の声に宿る不
思議な力と「小山寛治」という男性の類
希なる演奏力と感性。それらが醸し出
す芳醇な世界に酔わされてしまう。

クリスタルドームという所は、開放
感を作り出している分、冬は強烈に寒
い。しかし北風が吹きすさむ日にもラ
イブは敢行される。そんな時、なつき
さんは、「大丈夫ですか?」と何度も
何度も聴衆に気を配り、憚む指でギ
ターを弾き続ける。ライブとは本来、
プレーヤーが観客に「聞かせるもの」
だが、彼女の歌を聞いてみると、いつ
の間にかこちらが「受け入れられた」
気持ちになってくる。「そのままでも
OKですよ」と総て許してもらえる気分
になるのだ。

彼女がボサノバと生涯向き合うと心
に誓ったのは、「ジョアン・シルベルト」
のビデオを見てから。「何で自然体で
奥ゆかしくて、精密でいて、それを前
面に見せつけてない…カッコイイ!」
と思ったとか。

寛治さんは、元々ホテルの中華レス
トランのシェフだった。彼は、ラウン
ジから聞こえてくるピアノ演奏を耳で
覚えて、やってみたら「弾けてしまっ
た」らしい。ピアノだけでなく、時に
はハポロという太鼓をエネルギーシ
ュに打ち鳴らし、手袋の中に隠し持った
シェーカーをシャカシャカと大胆に振
り回し、やたらと楽しそうである。「天
は二物を与えず」と言うが、小山寛治
という男性に、溢れる程の「音楽の才
能」を与えずにしまった「天」は、
慌ててほんの少し彼に与えるべき髪
量を控えめにしたのかも知れない。

香川出身のなつきさんと岡山出身の
寛治さんはそれぞれ異なるバンドで
活動中に、坂出市のイベントで初めて
出会った。なつきさんは「ラテンのピ
アノ、カッコいいな」。なんでこの人
こんなに上手いんだろう」と思い、寛
治さんは「あれ誰かいな? 僕が伴奏せ

ないかん! 名前聞かないかん」と思っ
たとか。それから三年ほどして二人は
「ボサノバをもっと掘り下げたい」と
いう共通の想いで「フェリアード」を
結成する。なつきさんは、「音楽する
なら小山さんとでなくちゃ」と言い切
り、寛治さんは「右に同じ」と傍らで
頷く。この二人の絶妙なハーモニーを
支えるものは、ボサノバに対する熱き
想いと絶大な信頼関係に他ならない。

フェリアードのCDを聴いた友人達
は、異口同音に「癒される」と言う。「寝
つきが良くなる」「寂しさが柔らく」「焼
酎が美味しく飲める」と、その効果は
様々だが、友人の一人、磯部さんの実
感にそれらは集約されている。彼女曰
く「高ぶった気持ちは静められて、落
ち込んだ気持ちは元に戻る。いつもフ
ラットな状態にしてくれる」と。

二人の夢は「フェリアードをずっと
続けていくこと。」ならば、それが実
現されるように、地元に住る私達自身
が「地替地賞」で「応援せないかん」、
そしてフェリアードのボサノバを聞き
たいと言う他県の人々にはこう伝えよ
う。「フェリアード(休日)には、香
川においでまい」

生きることは選択、ささへはご縁、

そして万事塞翁が馬

宮本 富夫

(高松大学 教授)

還暦をすぎた齡のせいもあるのだろうか、過ぎ去りし日々を想う機会が少し増えた。ことは二十七年前に遡る。夢が現実となり、海外での研究生活を始める機会を得る。縁を得たところは、カナダのアルバータ州にあるカルガリー大学理学部の生物学教室。はじめはカルガリー大学医学部のD教授へ宛てた一通の手紙。履歴書に加え、これまでにやってきたことと、これからやりたいことをしたため、思いをこめる。D教授とはそれまでに何の面識もなかったが、意が通じたのだろう、手紙は生物学教室へとまわされ、B準教授が受け入れてくださった。同じ材料を使っていることが一つの理由であつたらしい。おかげで医学研究のためのアルバータヘリテージ財団(AHFMR)から奨学金を得、カルガリーでの生活を、生後十カ月の次女を含む家族五人で始めた。プレリードッド

やビーバーとの出会いは楽しみだった。ほどなく、D教授にお会いすることになったが、つらいことに、間なしに天に召された。

カナダへ向かう前日の夜、N大学の副学長さんから電話をいただいた。公募に応じていたポジションへの誘いだつた。日本にとどまるか、カルガリーへ向かうか、迷う。しかし、受け入れ準備を進めてくださった先方のこと、便宜をはかってくれた勤め先の関係者のことを思うと、選択の余地はなかった。バンクーバーからカルガリーへの空路、眼下に広がる雪を抱いたロッキーの峰々は庄巻であつた。

カルガリー大学でオフィスを共にしたポールは、大阪生まれだつた。彼の出生証明書には、その当時大阪にあつた米軍病院の記載があつた。私は高松生まれ。彼の父は、戦後処理の教育部門担当で高松に滞在したK博士だつ

た。高松に縁のある戦後生まれの二人が、縁を得てカルガリーの地で出会う奇しき縁。出生証明書を持ち歩くポールに不思議な気持ちを抱くが、この証明書が出自を語る唯一の書類であると知る。彼を通し、プレリーに生息するスノウアウルの世界を知つた。

山一面黄色といったロッキーの秋を楽しむ頃、高松に住む父が彼岸へと旅立つた。私の望むことをほほ思い通りにやらせてくれた父とは、高松空港での別れが最後となつた。望むことの実に喜び、望まないできことに悲しむ。先人の言葉「万事塞翁が馬」を思い浮かべた。

沈みがちな心を、研究に集中させることでまぎらわしていた十二月のある日、一条の光が差し込んだ。ドイツのマインツ大学遺伝学教室のG教授から、研究費が取れたので、ビザの手続きをして一月から来るようにとの手紙

が届く。期間は二年間。願ってもない
いい知らせだった。シヨウジヨウバエ
の腫瘍遺伝子について研究したい願
いがかなえられる。カルガリーに留まる
か、マインツへ移動するか、難しい選
択と決断。契約途中に「来月からマイ
ンツへ移ります」と、B 準教授に言
出す勇氣を持ち合わせなかった。

この選択は私の家族にプラスとな
ったように思う。一九八六年の四月に
チェルノブイリ原子力発電所で思い
もよらない事態が発生。原子炉の爆発
事故だった。放射性物質を含む灰が
ヨーロッパの空に舞い上がった。マイ
ンツの空も例外ではなかった。もしも
という言い方が許されるなら、もしも
の時マインツ行きを決断していたら、
当時成長途上にあつた三人の子どもた
ちは、どのような事態に遭遇すること
なつていたのだろうか。ただ感謝。

一度流れ始めた流れを中断し、元の
流れに戻すことは想定以上に困難で
あつた。G 教授の下で、腫瘍遺伝子に
ついての研究をスタートさせたのは、
四年後の一九八八年四月、いくつかの
紆余曲折があつた。マインツでの生活
を始めてまもなく、二二年を経たので

乳製品、きのこの類をようやく食べら
れるようになった」と、ゲッチンゲン
大学医学部の T 教授が、私の気掛かり
を見透かされるように語られ、心に少
し安堵を覚える。それでも、チーズな
どを求める際には、産地の表示に気を
遣う日々であつた。放射線による遺伝
子への影響を調べてきた身には、次世
代、次世代へと続く、遺伝子の変化
がおこるかもしれないという事態は、
重かつた。

これら二度の留学は、いずれも一通
の手紙から始まつた。カナダとドイツ、
アメリカ大陸とヨーロッパ大陸、それ
までは縁もゆかりもなかつた研究者か
ら差しのべられたご縁。二十数年の時
を経たせいもあるのだろう、しみじみ
と縁の不思議さを感じる。振り返る
と、現在の勤め先の創立者である T 教
授との縁も不思議なものである。間な
しの二度の留学をこころよく許可して
くださった。研究の機会を用意してく
ださつた。マインツ滞在中に、学生と
ドイツ研究旅行に來られ、ライン上り
の船、フランクフルトの街中と一緒さ
せていただいた。この時が言葉を交わ
すことのできる最後の機会となつた。

一九八九年二月に、マインツ滞在を半
年間延長してもよいという知らせと、
T 教授の彼岸への旅立ちの知らせが高
松から届いた。

放射線と縁があつたように思う。大
学進学の折、被爆地である広島のを
選んでいた。遺伝学に興味を覚え、こ
の分野で研究を始めたかと思つた。放
射線医学総合研究所から赴任された N
教授、I 助手との出会い。両先生の下
で学位論文に取り組む。放射線による
遺伝子への影響を突然変異として検出
し、突然変異生成の仕組みを解明する
ことを目指した。大学院時代に、広島
女学院で、いくつかのご縁を得た。高
松出身の I さん、広島折鶴の会の世話
人 K さん、私の植物学の師匠 U 先生、
そして数学の F 先生。妻との縁も得た。
広島大学で天文学を教えられた M 先生
が、「彼女はあなたが研究という仕事
をすすめていく上でとても役に立つと
思います」と、おっしゃつてくださつ
た。二度の留学中も、家庭のことはす
べて彼女にまかせておけばよかつた。
彼女の両親が被爆者であることを後に
知る。子どもたちは被爆三世というこ
とになるのだろう。

小説風・江戸神仏歳時記 (23)

市ヶ谷・亀ヶ岡八幡宮



郡 順 史

一

市ヶ谷の亀ヶ岡八幡宮は、新宿区市ヶ谷の、文字通り中心にあり、しかもその上、総武線の市ヶ谷駅から三分という交通便利なところにある。

また由緒も歴史も古い、それでいて現在の東京在住の人たちに余り知られていない。

「市ヶ谷の八幡さまをご存知ですか」と訊くと、十九、二十代の人は当然としても、四十代五十代の人でさえ、「八幡さまは東京中いたるところにあるが、市ヶ谷のは知らなかったな。今度お参りしてみよう」といった具合である。

こう言う筆者でさえ、この八幡さまを知ったのは昭和の末年、平成の初めごろだから、あんまり威張れた話ではない。

筆者がこの八幡さまの存在を耳にしたのは、東京に「ぼっくり神社」あるいは「ぼっくり寺」がないか調べている最中であった。

友人の一人が、「市ヶ谷の八幡さまに願をかけ、お願いすると、ぼっくり死ねるそうだよ」と教えてくれた。

へえ、そんな近いところにあったのか、と思いきさつそくお話しを伺いにと、神社へ向った。

すると神社は、大きい通りに面して、鳥居も立つ

ているし、神社名をしめす石柱も立っていてすぐに判った。

だが鳥居を見て立止ってしまった。

眼の前に、わりと急の坂になっている石段があり、この石段を登って行かねばならないからだ。

この石段を登り切らなければ、当然拝殿にも社務所にも行けないのだ。あとで訊くと、この石段は七十七段あるそうだが、その時の筆者の眼には、百段以上の急坂に、と思え、あいく左足関節を痛めていたので、拝殿から参拝するのをあきらめて、電話で、「おたくの八幡さまは、ぼっくりのご利益があり、願をかけお願いし、お札をいただくとはつくりとあの世へ行けるという話をきいたのですが、お話をうかがいに行ってもよろしいでしょうか」と訊いた。

長く病氣にかかったり、手足など動かなくなつて人に迷惑をかけた世話になるのが嫌だ、どうせ死ぬなら、ある朝ぼっくり死んでいたい、というのが、六十歳をすぎた人々、殊に女性にとつての悲しい、そして素朴な最後の願ひ、なのである。

ところが電話にお出になった八幡さまの神宮さんは、「当社、いやどの神様も、長寿のお手伝いをする、と言うことがございまして、早く死ぬなどという、死にまつわるご利益などをなさる神

様などおられません。当神社の神様も同様でございます」と、心をこめたご返事をいただき、顔が赤くなるほどの恥かしい思いをした。

考えるまでもなく、人の生命を奪う神さま仏さまなど居ようもなく、そうした神仏を探すほうが間違っていたのだ、と遅まきながら悟つた次第だった。

その後八幡様にお詫びと、歴史、由緒、たたずまいなどを拝するため、参詣させていただいた。

但し石段は遠慮して、すぐ脇にある通称を女坂とよばれるゆるい坂道をたどらせていただいた。

そして一つの発見(?)をした。

女坂の途中左側に小さな神社があり、茶木稲荷神社とおっしゃって、眼に関するご利益があると、今でも願かけ参拝の人々の足は絶えない、という評判である。

縁起によると、もともとこの地に祀られていたが、ある時、お使いの白キツネが、あやまつて脇に植えてあつた茶の樹のがつた枝で眼を突つき、痛さと失明のおそれに泣いて身もだえた。

それを見て可哀そうに思つたお稲荷さんが、眼に薬効のある霊薬をおさずけになつた。するとキツネの病も痛みもたちまち去つてしまい、キツネはこの有難さを人間にもわけてやろうと、お稲荷

さまの許しを得て、正月の三ヶ日、茶を絶って祈願すれば治るようになってやっつた、というのである。さてではご本家の当八幡様の由緒、歴史、挿話などをたどってみよう。

この神社は文明間、太田道灌によって江戸城内に守護神として創建されたという。もともとは鎌倉の鶴岡八幡を勧請しお祀りしたゆえ同じ鶴岡八幡とすると分社と受けとられかねないので、鶴の対語は亀ゆえ、一字替えて亀ヶ岡にしようとしたという。

二

この当時、関東には「八幡神社」はすこぶる多かった。

いずれも御祭神は変らず神宮皇后様であるが、この神社をあちこちで祀るようになったのは、八幡神社は源氏の守護神だから、という伝えが、特に武士間に強く信じられていたからであった。

その由緒を簡単に記すと、その頃、東北平定はほとんど源氏の任務であった。

源頼義はあらためて東北平定の令を受けて出発しようとしていた。

その同行を必死に願ったのが後に八幡太郎と名

を変えた長男の義家であった。義家はその時七歳。「元服を終えぬ者は戦さに連れて行くことは出来ぬ」

父から頭ごなしに拒否され、ならば元服いたします、と叫んで、源氏の守護神として崇敬をあつめていた石清水八幡宮に頼みこんだ。

当時、武家に生まれた者は、誰しも十五、六になると元服の式を行い、これを以て成人と自他に認められたのであるが、義家はまだ七歳である。

いくら元服を行ったからといって、成人と認められるかどうか、神社側も少々ためらいを覚えたが、本人が熱心だし、彼自身の体格風姿も、どこから見ても十五、六歳以上に見えるし、というわけで、社頭において盛大な元服の式を行った。

この時、不思議が起った。

終りちかくなつて、どこからともなく陣太鼓の低い音が聞こえ、その音が周囲をとり囲んだとおもうと同時に、空に純白の雲が、あたかも白旗をふるが如く四流、浮いて、去りもせず消えもせず、ただよいはじめたのである。

すると義家は、すつくと立上り、右手を高々とあげて四流の白雲を指さし、「我は八幡太郎義家なり！」

と叫んだ。

と、これまた同時に白雲は、義家の頭上を四回まわって北へ消えて行った、という。

境内にいた源氏の兵たちは、この不思議を目視し、暫時息をのんでいたが、白雲が去ると一斉に勝どきの声をあげた。

この時から、源氏は純白の長い白旗をかかげて戦にのぞみ、勝利した。ゆえに源氏にとつて白旗は身を護ると同時に、勝利の旗印として尊ばれて来たという。

事実、義家もこの時、父頼義に従つて戦い、抜群の戦いぶりをみせ、源氏の新しい若き武將よ、とたたえられたという。

そのたたえが嵩じて、自分の領内などに八幡様を祭り、自家の武運の長久を祈願したゆえ、所々方々に八幡様のお社が増えた、という次第であった。

一所懸命、という言葉がある。現今は一生懸命と、所を生に変えても通用するが、もともとの使用上の意味は、所とは、自分の領地、墳墓の地をさし、これを拡大、侵されざるよう固く護るのに、生命を懸ける、と意味が本来なのだが――。

はてさて、太田道灌の時代は、江戸城の守り神といった所で、守る城そのものが砦に毛の生えたような小さなものゆえ、神社そのものも軽視され

ていたようであるが、徳川の天下になるとそうはいかなかった。

家康が江戸に入り、城を築くにあたつて、当然大きな天下城の規範になった。

そこで周囲の神社仏閣はほとんどすべて、といつてよいくらい外濠の外に移転を命ぜられた。ウンと言わなければ神社仏閣そのものが壊されるのであるから、引越すものも止むを得ないこところであつた。

市ヶ谷亀ヶ岡八幡社は、当然旧江戸城内の濠の中にあつたが、即日の移転を命ぜられた。神社側として一応太田道灌の名を出したり、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮と同等の源氏の守り神（徳川家も源氏を稱している。少々怪しいが）関東東北の武神であるから移転は神位を傷つける、と稱して移転を中止させようとしたが、通らなかつた。

しかしこの移転は、むしろ神社に発展をもたらせた、と言えるかもしれない。

移転当時は小さな岡の上であつたが、外周に民家が無いため境内は広大であつた。そこへ祭り日となると、江戸中から集つて来たのではないかと、思えるほどの、掘立小屋の見世物をはじめ、屋台、床敷売店など、種々の売り手が集つて来、見物人、参詣人がおし寄せて来て、たちまち江戸で

も一、二を争う賑わいをみせる祭り風景を現出した。

参詣人が一日に二人や三人という淋しさよりも、とにかく大勢参って、賑やかになったほうが神社側にとっても嬉しい、それにお賽銭だとして多額にのぼるだろうに。

かくて亀ヶ岡八幡宮は、大發展をとげ、江戸時代を通じて、賑わう神社としての定説をほこったようだ。

そうした中において、「ぼっくり」利益の伝説、評判などが生まれたのではなからうか。とにかくいつものように、物織りのお年寄りを探して、話をきく事にした。

三

しかし今回の訪問聞きとり調査は意外に苦労した。

というのは、近所にいわゆる住民という人が住んでいないからだ。隣の建物を見ると、すべてが四階、六階建てのコンクリート造りで、事務所ふうのものばかりで商売をせずに日常生活をいとなむ、いわゆるしもたや風の家というのが見つからないからだ。これでは爺さん婆さんがいないし、

従って古い知識も聞かれないだろうと、半分あきらめかけたなら、これも御利益の一つか、少し飯田橋寄りに歩いた所に小さなモダンな喫茶店があったのである。

喫茶店は人の集る所、何か得るものがあるだろうと、ささやかな望みを括して入ってみた。

コーヒーとケーキを前にして、若くて活潑な店員さんに、「となりの八幡様のことについて取材をしているんだけど、誰か話をしてくれる人がいないかしら」と訊くと「ああそれなら大ママがどうかしら、生まれたときからこの町を離れないぞうだから」と言って、七十代前半のようなお婆さんを連れて来てくれた。見るからに元氣そうで、しかもお喋り好きのようなお婆さんだ。

前の席に坐つてもらつて、いきなり質問の矢を放つた。

「この八幡様は、江戸時代、祭り日には江戸一番の賑わいだつたそうだけど」

「ええ、私も話しにはきいていますよ。でも賑わいは江戸時代だけでなく、明治大正、そして昭和の戦争に敗ける前まではそれはそれは人出一杯で賑やかでしたよ」

「日本が戦争に敗けたので、人が来なく」
「そうじゃありません。境内がせまくなつたか

らではないかしら。それとお祭り好きの男性が滅ったからかしら」

「その頃は、本当、男は戦争に行つて、ずいぶん戦死したりしたからね」

「そうよ。私も戦地へ征く兵隊さんを、軍歌を唄つてお社前までお見送りに行つたものだったわ」
お婆さんは一瞬、声をしめらせて眼を閉じ、短い思い出にふけつたようだ。

それを突き破つて、筆者はあたらしく重要な質問の矢を放つた。

「神社さんには江戸時代から、ぼっくりご利益、つまり祈願しお札をいただく、ある日、夜かな、自分でも知らないうちに死ぬことが出来る、という話があるんだけど…」

「ああ、そうした噂話は私もずいぶんと聞きましたよ。でも事実かどうか、本物を見たことが無いから、はっきりは知りません」

「神社さんでは絶対そんなご利益はありません。デマです。無責任な噂話です。とおっしゃっていますか…」

「でも、人間年をとると、入院したり、人様のお世話にならずに、ぼっくり死にたい、と誰でも思うのじゃないかしら。淋しいけど理想的な死の迎えかたなのよ」

お婆さんはきつぱりと言い放つた。

思わず首肯うなづいてしまった。一つの大きな悟りだと思つたからである。

筆者と、この亀ヶ岡八幡宮までに、二十二個所の江戸時代から続く神社仏閣を尋ね歩き、ご利益やご神徳などを調べたり、更には少し前、元禄時代に、全国の一の宮神社八十六ヶ所を二十三年かけて巡拝した神道家・橋三善という人の伝記小説を書いたが、勉強したわりには、神道とは何か？ 神さまとは？ と人様に説明出来るくらいの理解すら出来なかつた。只一つ判つたのは、神さま仏さまをお参りすると、体全たいがすぐ清々しくなる、これが神さまだ、ご利益だ、と思つたことである。

この事を、知人の神道家の人に話したら、それでよいのだ、それが最初の悟りで、重ねるたびに「生きているよろこび」が次第に深くなってゆくのだ、と教えられた。

この事もよくわからないが、ともあれ長い人生の合い間に、ちらつとでも「ああ生きていた。清々しい気持ちをおいただいた」と思えたらよいのではなからうか、と思つた。

これからもあちらの神社、こちらの仏寺と探訪し、記しますから読んで下さい。以上。

(表紙説明)

■石あかり

二〇〇五年にはじまった「むれ源平石あかりロード」は、今や高松の夏の風物詩。国土交通省の日本風景街道にも登録されている。

有限会社島本石材工業

所在地／香川県高松市牟礼町牟礼二四二四―五

TEL／〇八七―八四五―九二八二

FAX／〇八七―八四五―三三五六

午前八時～午後五時 定休日／日曜日・祝日

「酒林」随筆特集 第八十二号

平成二十三年十一月一日発行

発行人 西野信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行人 西野金陵株式会社

高松市牟礼町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。